東亜同文書院高昌廟桂墅里校舎について

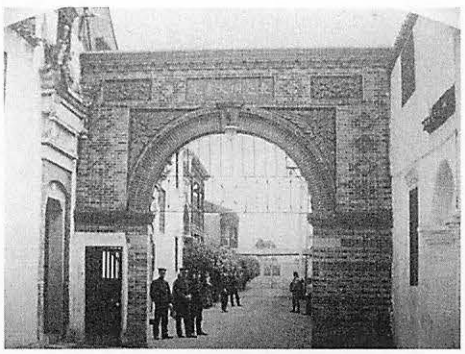
愛知大学東亜同文書院大学記念センター/
オープン・リサーチ・センター　R・A
石田卓生

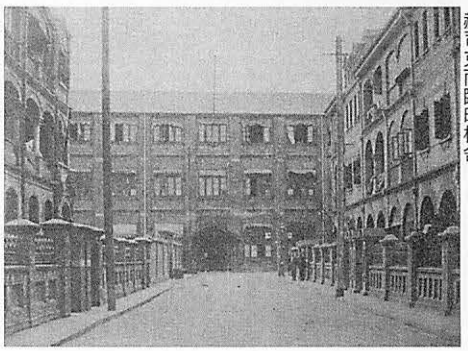
[I]

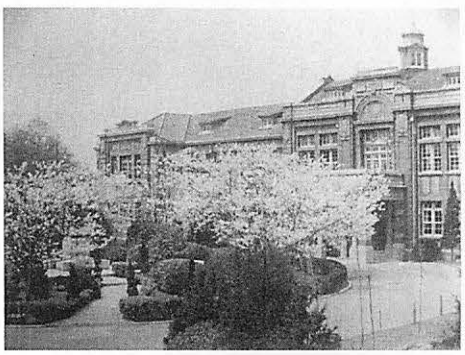
はじめに

1901年5月26日に開校し、日本の敗戦とともにその歴史を閉じた東亜同文書院は、上海で高昌廟桂墅里（クイシュリ）、赫司克而（ハスケル）路、徐家匯虹橋路、徐家匯海格路と4回移転をしている。最初の高昌廟桂墅里校舎は1913年の第二革命の戦禍で失われ、赫司克而路仮校舎を経て徐家匯虹橋路に校地を定めるものの1937年の第2次上海事変で全焼、徐家匯海格路にある交通大学の施設を臨時校舎として敗戦をむかえた。このような外的要因よって学校運営に支障をきたすことは、東亜同文書院の淵源といえる日清貿易研究所が日清戦争前夜の不穏な状況下で閉鎖を余儀なくされたこと、前身校である南京同文書院が義和団事変の余波をうけて上海へ移転していることにもみられ、不安定であった中国国内の政治情勢と変転また悪化していく日中関係のもとで教育事業を行う上で避けられないことだったのかもしれない。だが、そうした影響はすべて不測のことであり、もちろん開校時においては高昌廟桂墅里の校舎こそ唯一の東亜同文書院であった。

これまで、この最初の校舎については、江南機器製造総局[1]付近の高昌廟桂墅里という場所にあり、かつて経元善が開いた学校の跡地であったと紹介されるのみで、現在の上海での位置すら明確にはされてこなかった。このように名称こそよく


高昌廟桂墅里校舎校門


赫司克而臨時校舎


徐家匯虹橋路校舎

海格路臨時校舎

知られているものの不明な点が多い高昌廟桂墅里校舎について、諸資料を検討することによってその実像をあきらかにしていきたい。

［II］

高昌廟桂墅里

高昌廟は上海県城南郊にあり、一帯は高昌廟鎮という町であった。現在の盧湾区南部から南市区南西部一帯にあたる。この地には江南機器製造総局がおかれていたものの、県城や租界といった市街地から離れており、図1から読みとることができるように19世紀末から20世紀初頭の時期には都市としての上海と一体化していなかった[2]。

〔江南機器製造総局は〕1876年には敷地400余ムー〔1ムーは約6.7アール〕［中略］1904年には、13工場、労働者数2913人、管理要員を加えると3592人、住宅2579棟。まさに空前の工業団地となった。

高昌廟は〔県城〕大南門から直線にして約3キロ。ここと県城・租界とのあいだには幹線水路も幹線道路もないし、建設もされなかった。輸送はもっぱら黄浦江の水運によったのである。[3]

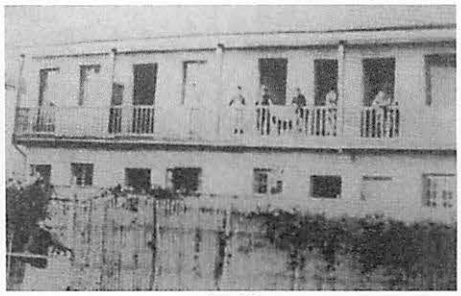
これを裏付けるように、東亜同文書院第1期生は、上海市街を通らず、虹口碼頭で艀船に乗り換え黄浦江上流の江南機器製造総局から上陸して高昌廟桂墅里校舎に入っている[4]。

この高昌廟周辺にあった桂墅里という地名は現在の一般的な地図にみることはできないが、その周辺と想定される地域を実際に訪れたという趙夢雲氏は、その様子を次のように述べている。

〔高昌廟桂墅里は〕現在の南市製造局路（ナンシーヅーチヤオチユイルー）と斜土路（シイエトオールー）との交差点の南側であるという。自宅から路線バスに揺られて一時間あまり、おりたところからは中心地からはかなり離れていて、「下只角（シヤーチーチヤオ）（下町）」と呼ばれるいかにも寂しくみすぼらしい場末だった。あたり一面に、貧弱なバラックが集まっている。[5]

しかし、諸地図を比較するに趙氏が推定した場所は本来の位置より北側であったようである。

桂墅里の地名は、東亜同文書院が徐家匯虹橋路校舎に移った1917年の地図である図2上に確認することができ、おおよその位置を把握することができる[6]。図中「桂墅里」の南側には東亜同文書院生が食事に度々訪れたという「南風閣」[7]をみることができ、この場所こそ校舎のおかれた高昌廟桂墅里であったと考える。



南風閣

さらに出版元、刊行年など不明ながら1910年代の上海を伝えるとされる地図である図3には[8]、右書きで「旧東亜同文書院」と印字されている。これを図2及び現在の上海地図である図4[9]と比較すると、街路や周辺に存在した湖北会館、常州会館（常州八邑会館）、瞿真人廟などとの位置関係から、図1「桂墅里」と図2「旧東亜同文書院」は同じ場所であり、それは図4にみえる現在の上海第九人民医院（南市区製造局路639号）あたりと推定される。

図1　杜麟編「新絵上海白廂」

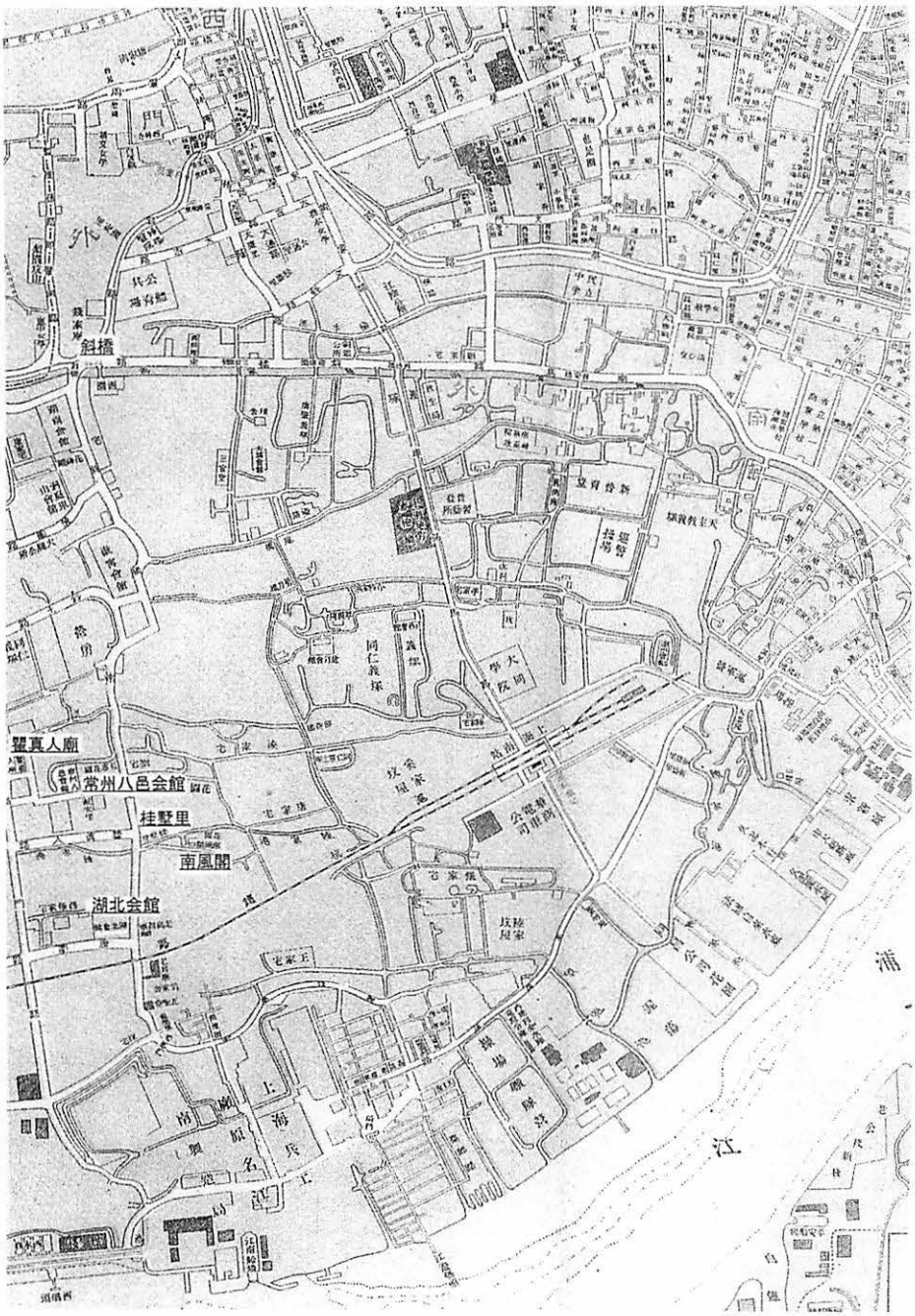


図2　童世亨編『上海県城乃南市分布』（商務印書館、1917年）

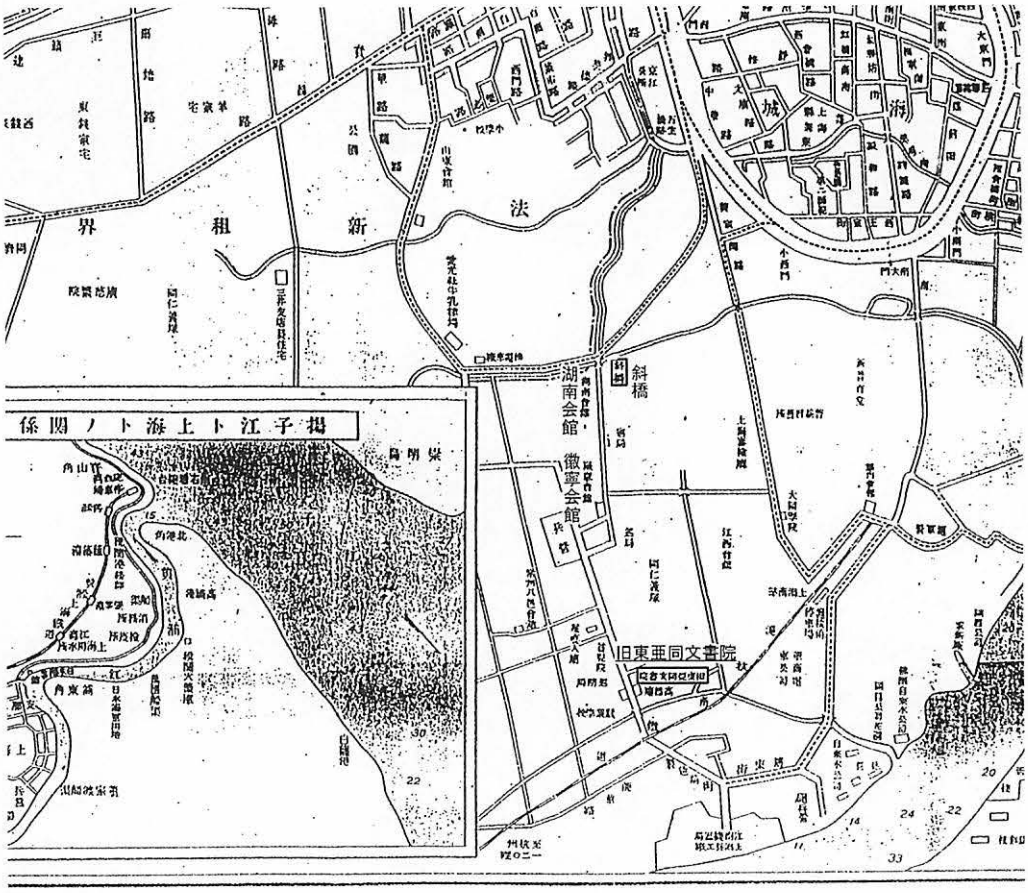


図３　「上海市街図」（1913年第２革命以降のものとおもわれる）

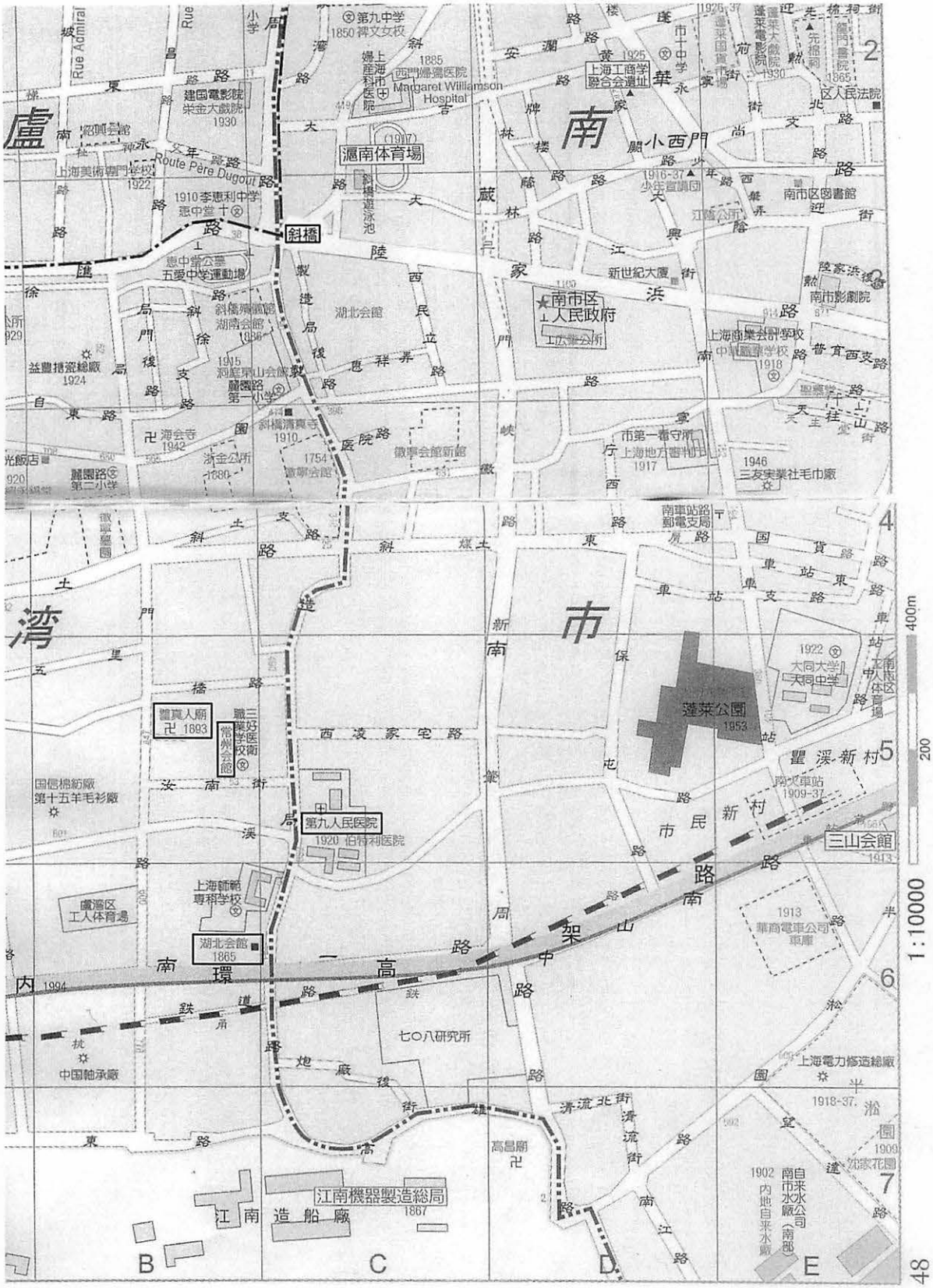


図4　木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』

[Ⅲ]

経元善の女学校
――その施設と東亜同文書院――

高昌廟桂墅里校舎は、東亜同文書院が入る以前、すでに学校として使用されていたものであった。東亜同文会会長近衛篤麿（1863年8月10日～1904年1月1日）の代理として開校式に出席した東亜同文会副会長長岡護美（1843年～1906年）は次のように述べている。

本日書院に至り、親しく一般の概況を査察するに、校舎の設備の如きも曾て仏国人が女学堂に充てん為特別に建築したるものゝことゝて、教場、寄宿舎、厨房、浴室、圊厠等に到る迄、殆ど完全に近く、空気の流通、運動場の施設、之を吾国の各学校の設備に較ぶるも毫も遜色なき[10]

もとはフランス人による女学校であったと長岡は述べているが、後述するようにこの場所で行われた教育活動は中国人や日本人によるものしか確認できない。長岡と同じく式に参加していた東亜同文書院教授根岸佶（ただし）[11]は、学校施設は経元善がつくったものだと述べている。

〔根津一院長は〕一団の教職員学生を引率して上海郊外高昌廟桂墅里の新校舎に入つた。それは今を去る三十年前即ち明治三十四〔1901〕年五月であつた。名は新校舎であるが、実は前電報局総督弁経元善氏が住宅に隣接して造つた支那式貸家四棟の一郭で、其れは曾つて学堂として利用したことのある粗末な建物であつた。五間宛つ楼房三棟を寄宿舎に充て、教室は五間の平屋の内、壁を取払つて更に適当に二部屋に区切つたもので、従つて室内には丸柱が何本も立つて居る有様であつた。別に経氏の居宅と同じ廓内で一屋を借入れ、左の廂房を書院の事務室とし、右の廂房を小使給仕の部屋とし、正庁を応接間と食堂に用ひ、楼上の右室を院長、左室を教頭、中央諸室を教職員の書斎兼寝室に割当てた。[12]

この高昌廟桂墅里校舎の開院当初の規模は、「当時の校舎は南寮一宇にして之を二部に分かち、一を教室とし、一を寄宿舎とす。事務室教職員住宅は別に設く」[13]という記述、やや後の姿を伝える「東亜同文書院平面図　明治41年5月17日現在」[14]及び「東亜同文書院平面図」[15]などを参考にすると図5に示すようなものとなる。それは中国人住宅街ただ中のささやかな規模のものであった。

東亜同文書院校門　中国人街の奥に校門がみえる
（注14所収）

東寮寄宿舎と庭球場　手前の建物が南寮、奥が後に増築した東寮
（注15所収）

さて、根岸はもともとあった学校の運営者は経元善であると伝えていた。かれは清末上海の有力者である。

経元善（1841年8月29日～1903年）、字は蓮珊、蓮山。号は居易子、小蓮池主人。浙江省紹興府上虞県の人。上海の有力金融家、企業家として銭荘、洋務企業を経営するかたわら変法運動を支持し、教育方面でも活動した。思想的には同郷の王陽明

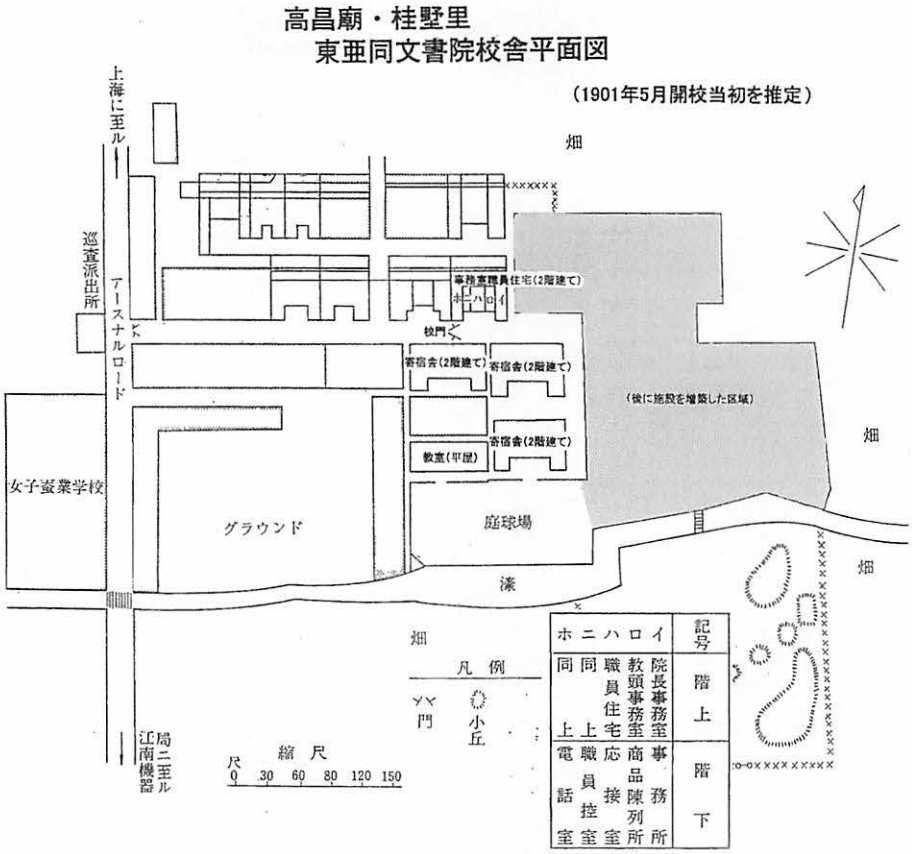


図5　1901年当時の東亜同文書院桂墅里校舎

の影響が強かったという。1882年、盛宣懐[16]を最高経営者とする電報局の上海分局総弁となり、上海経済界に重きをなした。官僚の腐敗や反対派商人との確執から次第に社会改革を志すようになり、張之洞[17]を通して面識をえた康有為らの変法運動を支持するようになる。教育方面では、度々私財を投じて学校を開いており、1896年の盛宣懐による南洋公学（後の上海交通大学）開校にも積極的に協力した。1900年、西太后が光緒帝を廃位しようとした際、章炳麟、蔡元培、唐才常など上海有力者連名の反対意見電報に加わったことから官憲に追われる身となりマカオに逃亡した。1902年に上海に戻るも、地位は剥奪され資産も没収されており失意のうちに病死した。

経元善について高昌廟との関わりがみえるのが、1893年にかれが開校した経正書院である。経元善の教育活動を研究した聂好春氏は、次のように述べている。

他于1893年底，募集资金在上海城南高昌庙附近创办了经正书院，聘请梁启超等新式知识分子任教，以期尽快有计划地培养通晓中西的洋务人才。［中略］但到1896年夏，因经费困难，加之盛宣怀欲以其地开办南洋公学，于是，经正书院并入南洋公学。[18]

（訳）かれ〔経元善〕は1893年末、資金を募って上海城郊高昌廟近くに経正書院を創立し、梁啓超など新しい知識人を教師として招き、中国と西洋に通じた人材を速やか且つ計画的に育成することを期した。［中略］しかし1896年夏、資金難に加え、盛宣懐がその地に南洋公学〔後の上海交通大学〕開校をしようとしたことから、経世書院は南洋公学に編入された。

この経正書院については、梁啓超が招聘されていることや、後に東亜同文書院最後の校舎となる

交通大学の前身校ともいえる点などが興味深いものの、具体的にどのような学校であったのかは不明である。数年を経て、この経正書院の跡であろう地に経元善は女学校を開校する。経元善の教育活動とキリスト教宣教師との関係について研究のなかで陳珺氏は、次のように述べる。

1898年3月，经正女学在上海城南高昌乡之桂墅里落成。4月12日，正式开学，最初有学生20余人〔原註：楮季能『中国近代学制史料』第1辑下册、华东师范大学出版社、1986年、p. 908〕。9月17日，经正女学又在城内淘沙场增设分塾，到年终有20余名学生就读。[19]

（訳）1898年3月、経正女学は上海の南、高昌郷の桂墅里に落成した。4月12日、正式に開院し、当初学生は20人余りであった。9月17日、経正女学は城内の淘沙場に分校を設け、年末には20名余りの学生が就学した。

「高昌乡桂墅里」とは高昌廟桂墅里のことであろう。陳氏は開校時期を1898年4月としているが、次に引くように聂氏は1898年5月としている。この相違は、おそらく陳氏が旧暦のまま日時を記したためと思われる。

为改变中国女子缺乏教育的现状，1898年5月，经元善在上海创办了经正女学。[中略] 经正女学初创时，聘提调1人，总管校务；聘请中文教习2人，西文教习1人，招收8岁——15岁的女学生20余人。广学会总干事李提摩太的夫人被邀请每月访问一次，林乐知的女儿林梅蕊任西文总教习，并兼授英语、算术、地图、图画等课。[20]

（訳）中国女子の教育欠如という現状を改変するため、1898年5月、経元善は上海に経正女学を創立した。[中略] 経正女学創立時、校務全般の管理者を1人、中国語教師2人、欧文教師1人を招き、8歳から15歳の女学生20人余りを入学させた。広学会総幹事李提摩太の夫人は招請されて毎月一回学校を訪問し、林楽知の娘林梅蕊は欧文の教師となり、英語、算術、地図、図画などを教えた。

ここにみえる李提摩太（Timothy Richard 1845年～1919年）、林楽知（Young John Allen 米メソジスト教会宣教師）は、ともに上海のキリスト教宣教師たちの出版組織である広学会（The Christian Literature Society for China、1887年 ～1956年）で活動していた人物である。また、林は高昌廟桂墅里近くの江南機器製造総局翻訳館で欧米知識を紹介する翻訳事業にも従事している。そのような李の妻や林の娘が直接関係していたことからもわかるように、経元善の女学校は欧米的な教育を中国の女性に行おうとするものであった。これは、女性の社会進出がすすんでいなかった当時の中国にあって革新的であった。さらに、『点石斎画報』原利集（図6）には、女学校設立に関する集会の様子を描いた「裙釵大会」（「裙」はもすそ・スカート、「釵」はかんざし。「裙釵」は転じて婦女子をさす）が収録されており、当時の上海で注目をあつめていたことをうかがわせる。

また、経元善の女学校が学生数20名余りの小規模なものであったことは、東亜同文書院が開院と同時に学生寮などを増築しはじめた理由を説明する材料となる。東亜同文書院第1期生は79名であったといわれ[21]、この学生数を前掲根岸の「五間宛つ楼房三棟を寄宿舎に充て」という証言に割り当てると一部屋あたり5～6人の計算となる。ちなみに、この人数はその後の学生寮一部屋収容人数と同程度である。このように開校時点での高昌廟桂墅里の施設は、1期あたり50～100名が入学し3年制であった時期全校学生250名程度であった東亜同文書院にとってはあまりに手狭であった。第1期生が入った時点ですでに飽和状態であり、2期生を入れるためには急ぎ増築する必要があったのである。実際、第2期生が入学する直前1902年3月に北寮、秋期入学となった第3期生についても入学直前の1903年6月に東寮が完成しており、開校3年目にしてようやく3学年すべ

図6　『裙釵大会』(『点石斎画報　大可堂版』第15巻　上海画報社、2001年)

ての学生を収容できるようになっている。

さて、高昌廟桂墅里の本校と城内の分校の2カ所で教育活動を行っていた経元善の女学校は、経済的問題などから本校は1899年に、経元善の失脚により分校は1900年中には閉鎖されている[22]。

1899年9月，戊戌变法失败，经正女学处境困难。1900年初，经元善联合章炳麟、唐才常1231名绅商和维新人士上书，反对废黜光绪。清廷下令通缉，经元善逃亡澳门，经正女学“力乏难支”，于1900年中秋〔1900年9月8日〕前后停办。[23]

(訳) 1899年9月、戊戌の変法は失敗し、経正女学は苦境に陥った。1900年初め、経元善は章炳麟、唐才常と共に1,231名の紳商と維新派の人々と上書し、光緒帝廃位に反対した。清政府は指名手配を命じ、経元善はマカオに逃亡し、経正女学は「力乏しく支え難し」となり、1900年中秋節前後に閉校した。

1898年10月底，经正女学又在上海城设分校，延请中西教习各1人。翌年初，学生总数增至70余人。[中略] 虽然由于维新运动失败、经费筹措困难、社会政治舆论等压力，经正女学总校于1899年8月停办，分校也已经元善反对清政府立储，亡走澳门而于1900年停办，但兴办女学之风却在上海等地上吹开。[24]

(訳) 1898年10月末、経正女学は上海城内に分校を設け、中国と西洋についての教師を各1名を招いた。翌年初め、学生総数は70人余りに増えた。[中略] 維新運動の失敗、資金調達の難航、社会・政治・輿論などの圧力をうけ、経正女学本校は1899年8月閉校し、分校も経元善が光緒帝廃位に反対し、マカオに逃れた1900年に閉校したのであるが、女学開校の風は上海などの地に吹きはじめたのである。

前掲根岸の文章では、東亜同文書院の事務室教職員住宅として「経氏の居宅と同じ廓内で一屋を借入れ」と述べており、東亜同文書院開校後も経

元善の家族が桂墅里界隈に住んでいたことをうかがわせる。失脚後、マカオに逃亡していた経元善は1902年頃には上海に戻ったとされており、不遇の最晩年を東亜同文書院のかたわらで過ごしていたのかもしれない。

[IV]

羅振玉の東文学社

経元善の女学校が閉鎖された後、その施設は羅振玉[25]の東文学社が使用することになる。東文とは日本語をさす。つまり東文学社とは日本語と日本経由の西洋の知識を学ぶ学校であり、藤田豊八[26]など日本人が教師として招聘され中国人教育にあたった。『対支回顧録』の藤田豊八の記事には次のようにある。

〔明治〕三十一〔1898〕年、羅振玉と謀り、上海郊南高昌廟に於て郷紳経元善の経営せし女学校の跡を引受け東文学社を設立し、邦文に依て科学を支那学生に教授し、一時の盛を極め、同志田岡嶺雲を以て講師となち［中略］後年前清の遺老として天下に馳名したる王国維の如きも、亦当時東文学社の学生として在学した。[27]

この1898年という開校時期は、経元善の女学校（同年5月開校）と重なっているが、東文学社の開校当初の校舎は上海市街の新馬路（現中山南路二路）梅福里[28]におかれ、後に高昌廟桂墅里へと移転したのであり、矛盾とはならない。1899年5～6月[29]頃に上海に渡り東文学社で教鞭をとった田岡嶺雲[30]は次のように高昌廟に東文学社があったこと、その場所は後に東亜同文書院となったことを述べている。

我等の学校は初めは英租界に在つたが、経済の都合から後に高昌廟といふ処に移つた。今の同文書院〔東亜同文書院〕の在る処で、虹口からは上海城の郭外を沿うて約二里近くもある。[31]

前掲聶氏は、経元善の高昌廟桂墅里の女学校は1899年8月に閉鎖されたとしていた。これに対して後掲する岸陽子氏、前掲の趙夢雲氏は、田岡が上海に渡る1899年5～6月以前に東文学社の高昌廟桂墅里移転があったとしており、数カ月の重複期間ができてしまう。この齟齬を一にする資料を見出すことができないが、1899年初夏頃までには高昌廟桂墅里の経元善による学校は閉鎖され、代わって東文学社が入ったのはたしかなようである。

この東文学社移転については、張之洞、盛宣懐の影響があったと推測する。両者は、張之洞から漢陽製鉄廠の経営を盛宣懐が受け継ぐなどつながりがあった。この盛宣懐が最高経営者を務めた電報局においてかれの部下にあたるのが経元善であり、経はかつて盛の南洋公学開校に協力し、自身が運営する経正書院を吸収させてもいる。さらに盛宣懐は経元善失脚に際してかれのマカオ逃亡を助けてもいる。また、経元善は張之洞を通して康有為と面識をえて変法運動支持者となっており、ここにも関係が認められる。このように経元善、張之洞、盛宣懐はそれぞれつながりがあった。東文学社の羅振玉についても、1901年張之洞に請われて湖北農務局総理兼農務学堂監督として武昌に赴任し、1901～1902年には張之洞治下の湖北省や江蘇省の命をうけ教育制度視察のために日本に渡っていること、1902年に盛宣懐が開校した南洋公学で東文科監督に就いることから、張之洞、盛宣懐との関係が認められる。裏付けとなる資料を見出していないものの、このような関係を考慮すれば、張之洞、盛宣懐の働きかけによって経元善から羅振玉へと学校設備の斡旋、移管が行われたのだと考える。

この東文学社では、岸陽子「王国維と田岡嶺雲：『人間詞話』をめぐって」よってあきらかにされているように、王国維が田岡嶺雲をとおしてショーペンハウアーを体験し、その思想形成に大きな影響をあたえるという近代中国思想史上重要な意

東亜同文書院桂墅里校舎関係年表

年	事項	経元善の教育活動		上海　東文学社関係	東亜同文書院関係
		高昌廟桂墅里	城内		
1890					9月　日清貿易研究所
1891					
1892					日清貿易研究所
1893					
1894	8月　日清戦争(～1895.8)	経正書院			8月　日清貿易研究所解散
1895					
1896		南洋公学へ吸収			
1897		12月「裙釵大会」(女学開設についての集会。「点石斎画報」)		羅振玉、藤田豊八「農学報」	
1898	6月11日　戊戌変法 9月21日　戊戌の政変	4月(旧暦3月)経正女学落成 5月(旧暦4月12日)経正女学開校		3月　上海東文学社(新馬路〔中山南路二路〕梅福里。一説に7月)	
			10月31日(旧暦9月17日)　淘沙場校設置		11月東亜同文会成立
1899	3月　山東で義和団蜂起	8月　経正女学本校閉鎖		5～6月　田岡嶺雲、東文学社の教職に就く	4月　近衛篤麿欧米視察へ出発 10月29日　近衛篤麿、欧米視察の帰途、南京に劉坤一を訪問 11月　近衛篤麿、京都に根津一を訪ねる
1900	経元善失脚 4月　義和団北京占拠 6月21日　清朝、列強諸国に宣戦布告　26日　東南互保条約 8月14日　八カ国連合軍北京占領	東文学社が施設を使用	年頭　李提摩太夫人へ移管？ 7月　淘沙場校閉鎖	5月　田岡嶺雲、帰国 中秋頃　上海東文学社解散	3月　南京同文書院開校 5月　根津一院長就任 6月7日　根津一、南京で劉坤一と会談。武昌に張之洞を訪ねようとするも義和団事変により断念し7月10日帰京 8月20日　上海に移転 11月　全国遊説(学生募集)
1901		東亜同文書院が施設を使用			2月12日　同文書院擴張設備委員景山長治郎、校舎借入のために上海出張 4月25日　東亜同文書院入学式(東京華族会館) 5月26日　東亜同文書院開校(高昌廟桂墅里校舎) 7月　近衛篤麿、北京視察

味をもつ現場となったものの、1900年中には高昌廟桂墅里から姿を消している。

[V]

東亜同文書院の高昌廟桂墅里校舎

東亜同文書院開院式

1901年5月26日、東亜同文書院はかつて経元善が女学校を運営し、後に羅振玉が開き王国維が学んだ東文学社の施設を校舎として開校した。この際、前年南京に開校したものの義和団事変の余波をこうむり上海に移転していた南京同文書院を吸収している。

確認しておかなければならないのは、この上海での新学校開設が、義和団事変の影響によるものではなく、それ以前より予定されていたものであったことである。1899年10月、両江総督劉坤一[32]と会談し南京同文書院開設についての了解と支援をとりつけた東亜同文会会長近衛篤麿は、同年11月東亜同文会会員中の日清貿易研究所出身者のはたらきかけをうけ根津一とはじめて会い[33]、中国での教育活動について話し合いをもった。

> 此の種の人材養成の地は、上海を以て最も適当なりと考へつゝありければ、此の旨を近衛公と語り合ひ、略ぼ同意見なりし故、予は先づ同文会長近衛公爵代理の資格にて［中略］両江総督劉坤一氏及び湖広総督張之洞氏と会見、その賛成を得る必要あり[34]

この時の根津は東亜同文会にまだ参加していない。かれは、上海にあった日清貿易研究所での経験をふまえた中国通として持論を伝えたのである。注目すべきは、校地として上海が適地であるという提言を近衛が受けいれていることである。しかし、翌1900年3月、東亜同文会は、上海ではなく南京に学校を設置した。これは、根津との会談以前すでに南京での開校がすすめられていたためであろう。実際、同年5月、南京同文書院初代院長佐藤正が病気のために辞職すると、近衛は根津を招聘し、その言に従うように南京同文書院解散と上海の新学校開設を指示している。

> 時に佐藤正氏偶々病を得て職を辞す。是に於て同文会近衛公は、先生に懇托するに其の後任に当るべきを以てし、且つ更らに大規模の学堂を上海に設立して、南京同文書院を解散併合するの計画を委嘱せり。[35]

これをうけて根津は同年6月に南京に両江総督劉坤一をたずね、さらに湖広総督張之洞に会うため武昌に向かった。この際、劉からは「目下の妙相庵の学校〔南京同文書院〕、及び上海に新興すべき学校に対しては、何事にても出来るだけ協力すべし」[36]と支援をとりつけている。これは南京同文書院が義和団事変の争乱を避けて上海に移る以前のことであり、義和団事変とは関係なく上海への学校設置がすすめられていたことが確認できる。一説に、劉との会談では南京同文書院用地の20年間租借が合意され、そこへの校舎新築計画もあったとも伝えられており[37]、義和団事変が激化する以前においては、南京、上海にそれぞれ校舎をおく構想があったのかもしれない。

義和団事変終息後の同年11月、東亜同文会は学生募集のために南京同文書院の上海避難を指揮した田鍋安之助を北陸地方、井上雅二を近畿、山陽及び四国地方へ、日清貿易研究所出身者から三谷末次郎を東北地方、郡島忠次郎を九州地方、小川平吉を関東地方へとそれぞれ遊説させている。しかし、文献で確認する限り、この時点では南京同文書院の15名ほどが上海の外国人住宅の一部を借りていた以外、東亜同文会は中国においてな

んら施設を所有していない。受けいれる校舎もないまま学生を募集していたことになるが、さきに引いたように両江総督劉坤一は上海の新学校への支援を表明しており、おそらく学生募集時には上海での活動について見通しがついていたのであろう。東亜同文書院それに先立つ南京同文書院はともに、一府県あたり2～3名の公費派遣生を入学者の中心と考えていることから、必要とする施設規模は想定しやすく、校地選定と学生募集を同時に進行することは可能であったと考えられる。

そして、1901年2月12日、日清貿易研究所出身の景山長治郎が同文書院拡張設備委員として上海に派遣され、新学校の校地、諸設備についての事務にあたり、5月8日に東亜同文書院第1期生を高昌廟桂墅里の校舎にむかえた。この新学校設立について両江総督劉坤一の支援があったであろうことはすでに触れたが、1901年5月26日高昌廟桂墅里の東亜同文書院で行われた開院式には劉坤一の代理のほかに湖広総督張之洞の代理や盛宣懐の名がみえる。

清国ニテハ盛宣懐氏、袁〔勛樹〕上海道台、両湖総督〔湖広総督〕張之洞氏ノ代理者、両江総督劉坤一氏ノ代理者、浙江巡撫余連沅氏ノ代理者、安徽巡撫王之春之ノ代理者[38]

張之洞は、代理を参列させるだけではなく「張之洞氏は特に記念として石刻の詩経を寄贈せられたりといふ」[39]と伝えられており、学校当局との強い関係をうかがわせている。さらに、張之洞と盛宣懐は、先述したように経元善の女学校施設を東文学社に転用したことについて関係していた可能性がある人物であった。かれらに高昌廟桂墅里の学校施設について大きな影響力があったとするならば、東亜同文書院の場合にも同様の可能性が生じよう。

また、この場所が東文学社であったこと自体が、中国側からみて日本人受けいれに適した施設だと判断する材料となりうる。なぜならば、「〔東文学社は〕その他農商務省練習生及び私費留学生等を収容して梁山泊を形成した」[40]と伝えられているからである。これまで中国人対象の教育施設としてとらえられてきた東文学社には、藤田豊八や田岡嶺雲といった教師以外にも日本人留学生が存在していたようだ。こういった東文学社の体裁は、中国人教育を実施しようとすると同時に農商務省練習生を受けいれていた南京同文書院と共通する。もちろん、羅振玉運営の東文学社と日本の有力政治家近衛篤麿率いる東亜同文会の教育活動にはさまざまな違いがあるだろう。しかし、東亜同文会の協力要請をうけた中国側が参考としたのは、南京同文書院であったと考えるのが自然であり、述べてきたような体裁上の共通から、中国側は旧東文学社の施設が東亜同文書院受けいれに適していると考え、斡旋したと推測する。

[VI]
おわりに

東亜同文書院が開院した高昌廟桂墅里の施設は、上海の有力者経元善が中国人運営では最初となる女学校として建てたもので、後に羅振玉が開き王国維が学んだ東文学社が使用したものであった。これらは、すでにさまざまな証言、研究のなかで断片的には触れられていたものの、それらはそこに関係した人々の足跡や思想を追うことに主眼をおいたもので、施設自体は注視されてこなかった。この傾向は、東亜同文書院研究においても同様で、おおよその位置や簡単な紹介がされてきたにすぎない。こういった高昌廟桂墅里という場所と施設自体への無関心は、1913年の第二革命によって校舎が失われて久しく資料が乏しいということ、東亜同文書院を専ら論じない研究ではその場所や施設自体はさして重要ではなかったことが理由として考えられるし、東亜同文書院関係者、とくに実際そこで学んだ人々にとってはあまりに身近な存在であったため、殊更とりあげる対象と

はならなかったのであろう。

しかし、考察してきたように、高昌廟桂墅里校舎はどこにあったのか、どのような校舎であったのか、またどうしてその場所におかれたのか、という疑問をあきらかにする過程でうかびあがってくるのは、東亜同文書院に関する研究についてのあらたな課題である。東亜同文書院開校に際して、教育事業を重視した張之洞や盛宣懐の支援が校地選定自体に関わっていた可能性は、これまで各々個別に扱われる傾向にあった東亜同文書院と近代中国教育史を、両者の関係性から考察する必要をせまるだろう。また、近衛篤麿主導による南京同文書院に対して、東亜同文書院は根津一とかれを支持する日清貿易研究所出身者が主導権を握っていた形跡があり、これまで連続性が強調されてきた両校について相違点をふまえてとらえなおす必要をせまるだろう。

---

1 江南機器製造総局。1865年、李鴻章によって設置された官立軍需工場。軍工廠としてだけでなく、翻訳館がおかれ欧米の科学技術導入機関として機能した。

2 杜麟編「新絵上海城厢租界全図」1898年（張偉編『老上海地図』上海画報出版社、2001年、p. 17）。

3 高橋孝助、古厩忠夫編『上海史』（東方書店、1995年）p. 56。

4 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』（滬友会、1982年）p. 93。

5 趙夢雲『上海・文学残像：日本人作家の光と影』現代アジア叢書35（田畑書店、2000年）p. 35。

6 童世亨編『上海県城及南市分図』商務印書館、1917年（同註2、p. 71）。

7 同註4、p. 436。

8 「上海市街図」（同註3、p. 138）。

9 木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』（大修館書店、1999年）pp. 48-49。

10 東亜同文書院滬友会同窓会（代表油谷恭一）『山洲根津先生伝』（根津先生伝記編纂部、1930年）p. 90。

11 根岸佶（1874年-1971年）和歌山の人。高等商業学校（現一橋大学）を卒業すると東亜同文書院開校と同時に教授に就き、学生による中国大陸踏査旅行を立案実現した。その成果をいかして『支那経済全書』（東亜同文会、1907年）を編纂する。帰国後は東亜同文会幹事となり、朝日新聞を経て東京高等商業学校（現一橋大学）教授となった。経済学博士。一橋大学名誉教授。

12 同註10、p. 444。

13 同註10、p. 85。

14 「東亜同文書院平面図」松岡恭一編『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』（東亜同文書院学友会、1908年）所収。

15 『在上海東亜同文書院一覧』（東亜同文書院、1911年）。

16 盛宣懐（1844年11月4日-1916年4月27日）江蘇省常州府武進県生まれ。官僚企業家。官主導事業に民間人を参加させることによって、中国の経済、産業の近代化をすすめた。教育事業にもとりくみ、南洋公学（後の上海港通大学）を設立し近代化を担う人材育成につとめた。義和団事変の際には、東南互保をはたらきかけ華南地域の安定に尽力している。

17 張之洞（1837年9月2日～1909年10月4日）直隷省南皮県の人。政治家、学者。1863年若くして進士に及第したエリート。山西巡撫、両広総督、湖広総督（一時両江総督兼任）を歴任した。中体西用を主張して外国人顧問や洋務派知識人をまねき、官主導による近代化を管轄地域においてすすめた。義和団事変時には、両江総督劉坤一らと東南互保を結び華南の安定をはかった。

18 聂好春「试论经元善的教育思想和教育实践」『华北电力大学学报（社会科学版）』第1期（2006年1月）p. 125。

19 陈珺「传教士与经正女学」『西南交通大学学报（社会科学版）』第5巻第1期（2004年1月）p. 50。

20 同註18、p. 126。

21 東亜同文書院初期の入学者数については諸説あるが、本稿では学生数について最も新しい研究である佐々木亨「東亜同文書院入学者の群像」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報』Vol. 11、2003年、p. 10）をとった。

22 陳珺氏によれば、経元善は失脚直前に女学校をキリスト教関係者へと譲ろうとしていたとされ、経のマカオ逃亡後

はキリスト教系組織によって運営されていた可能性もある。「1900年，经元善亡走澳门之前，将经正女学托付给李提摩太夫人照管，并且将校产划归教会名下，直至停办，可以说传教士与经正女学的存亡相始终」（同註19、p. 51）

23 同註19、p. 50

24 同註18、p. 126

25 羅振玉（1866年6月28日～1940年6月19日）江蘇省淮安の人。清末民国の学者。中国の国力をあげるためには農業振興が重要と考え、日本や欧米の農業技術を紹介する『農学報』を刊行し、この運動のなかで変法派と関係をもつようになった。1898年、日本人藤田豊八とともに「東文学社」を開いた。学生のひとりであった王国維の才能を認め支援している。啓蒙運動、教育活動での功績をみとめられ、清朝政府の教育部門で活動する。辛亥革命が起こると王国維とともに日本へ亡命し、甲骨文字研究をはじめ日本の中国研究に多大な影響をあたえた。1919年に帰国すると、散逸していく貴重な史資料の蒐集に尽力した。

26 藤田豊八（1869年～1929年）号は剣峰。東洋史学者。徳島県生まれ。中国での教育活動を経て東京帝国大学教授、台北帝国大学教授となった。

27 『対支回顧録』下巻（東亜同文会、1936年）p. 769。

28 岸陽子「王国維と田岡嶺雲：『人間詞話』をめぐって」安藤彦太郎編『近代日本と中国：日中関係史論集』（汲古書院、1919年3月）p. 90。同註5、p. 34。

29 前掲28、岸は5月、趙は6月とする。

30 田岡嶺雲（1870年～1912年）本名佐代治。文学者、評論家。文学、社会問題など幅広い分野において先鋭的な評論活動を行った。

31 田岡嶺雲『数奇伝』西田勝編『田岡嶺雲全集』第5巻（法政大学出版局、1969年）p. 610。

32 劉坤一（1830年～1902年10月7日）字は峴荘。湖南省新寧県生まれ。洋務派の軍人、政治家。太平天国鎮圧での功績が認められ台頭すると、江西巡撫、両江総督・南洋通商大臣、両広総督、欽差大臣を歴任した。義和団事変に際しては、湖広総督張之洞らと東南互保を結び華南の秩序維持につとめた。

33 同註4、p. 78。

34 同註10、p. 392。

35 同註10、p. 75。

36 同註10、pp. 392-393。

37 同註4、p. 77。

38 同註14、p. 28。同註10（p. 84）では袁勛樹は劉坤一の代理、張之洞の代理として劉怡上海知県があげられている。引用文の読点は引用者による。

39 同註10、p. 84。

40 同註27、p. 769。

引用に際して旧字体を新字体にあらためた。引用文中の下線、〔　〕内補記は論者による。